小樽れっけん

日和山灯台（ひよりやまとうだい）

小樽へやってきた船乗りたちのランドマーク

今年は、日本初の洋式灯台が起工されて150年となることを記念して全国各地でイベントが開催されている。日和山灯台がある高島岬は「日和山」として5月に小樽市の「北前船」日本遺産の構成文化財の一つに認定された。高島岬は小樽の人気観光スポットとなっているが、船乗りたちが日和（天候）を見たり、標識とした日和山であったとことは近年ではあまり意識されていない。

日和山は17世紀頃、江戸時代に航路が整備された時、各地に設置された。単なる地名ではなく船舶の寄港地ごとに設置された港湾施設の一種である。日和山は20世紀前半まで現役で利用されていたが、その後は開発でなくなったり、地名だけがのこったところも多い。この日和山灯台付近には、全国の日和山に設置された「日時計」と御影石の台石が、昭和28（1953）年の改築前までのこっていた。

当初、小樽では明治4（1871）年、海関所があった信香町に常灯台が設置された。水面上の高さ2丈6尺（約78m）のガラス張りで、常夜灯と呼ばれて小樽の名物になったが、同7年5月に火事で焼失してしまった。その後、何度か再建の要望があったが、10年近く灯台が無い状態が続いた。

同16年、小樽港に出入する船舶が針路を定める上で最も重要な地点として、祝津の高島岬に日和山灯台が建造され、10月15日に初点灯した。建設当初は木造六角形の白色の建物で、高さは約7・6m。二重に芯を使った石油ランプを灯し、その光は15海里（約28km）先まで届いたという。以後、日和山灯台は船乗りたちの重要な航路標識となった。近代的な灯台としては、同5年に設置された納沙布岬灯台に次いで北海道で2番目である。

同44年12月、日和山灯台に霧信号所が併設され、霧や吹雪などで視界が悪くなると霧信号を鳴らし、光の他に音でも灯台の位置を知らせるようになった。昭和7（1932）年2月には灯台に電気が通り、光源が石油ランプから電灯になり光が強力になった。同28年には現在の塔型コンクリート造の灯台に改築。同32年には映画『喜びも悲しみも幾年月』のラストシーンに登場したことで、一躍有名になった。

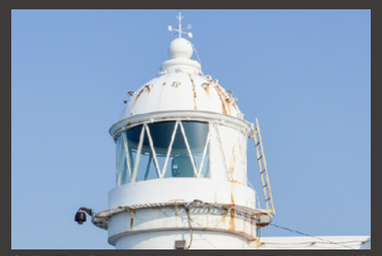
かつては灯台職員の生活施設もあったが、同60年4月、小樽航路標識事務所に集約されて無人となった。平成15（2003）年から小樽海上保安部の管轄となり、同22年3月末にはレーダーやGPSの普及に伴い日和山霧信号所は廃止された。現在、灯台記念日などで内部が一般公開されているが、その役割を知る機会は限られている。

「北前船」日本遺産の構成文化財となったことで、日和山以来のこの灯台の歴史と意義が再発見されるきっかけになることを期待したい。

撮影：落合 亮（小樽商科大学写真部）
文章・撮影：高野 宏康
（小樽商科大学学術研究員）

改築前の日和山灯台。信号旗は「何時の安全なる航海を祈る」を表す。

日和山灯台
（小樽市祝津 3-240）
明治 16 年 10 月 15 日、初点灯。同 44 年、霧信号所が併設。昭和 7 年、電灯明暗白光灯に変更。昭和 28 年、現在の塔型のコンクリート造に改築。同 43 年、灯台に赤白の横帯線が塗装される。同 60 年、小樽航路標識事務所に集約され無人となる。同 61 年、改築。平成 22 年 3 月、霧信号所が閉鎖。現在の光達距離は 19 海里（約 35km）。塔高 10.2m、灯火標高 49.8m。



灯台頂上部分。メタルハライド電球で 20 秒毎に 2 閃光する。

現在の日和山灯台。昭和61年に改築された。

日和山灯台付近にのこる石垣。

日和山灯台へと続く小道。

建物壁面はタイル貼り。一般公開では内部を見学できる。

隣接する小樽市鰊御殿、高島漁港とまちなみ、小樽港が見渡せる。

高島岬の崖下。小道を通って降りられる。

日和山灯台の解説プレート。

【参考文献】『小樽市史第一巻』（1958年）、『祝津町史』（1972年）、渡辺悌之助『小樽文化史』（1974年）、南波松太郎『日和山』（1988年）、『高島岬の日和山霧信号所 約100年の歴史に幕』（小樽ジャーナル、2010年3月25日付）、「日和山灯台のあらまし」（日和山灯台展示より）